

(24) 以下の通り訂正いたします。

## P284 共同発表者

誤

290) 初期治療過程に在る成人期乳がん患者の病理検査結果に基づく術後抗がん剤治療選択時の心理的状況

○若崎淳子<sup>1</sup>，谷口敏代<sup>2</sup>，掛屋純子<sup>1</sup>，掛橋千賀子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>鳥根県立大学，<sup>2</sup>岡山県立大学

### 【目的】

乳がん個別化治療の進展に伴い，病理検査結果に基づく乳房手術後の術後治療（adjuvant therapy）では患者は医師より術後薬物治療に関する複数の選択肢を示され，抗がん剤治療内容の選択や抗がん剤治療を受けるか否かの意思決定を迫られる。そこで今回，患者の語りを通して，初期治療過程に在る乳がん患者の病理検査結果に基づく術後抗がん剤治療選択時の心理的状況を明らかにすることを目的とした。

### 【方法】

質的記述研究デザイン。研究参加者：初期治療過程に在る乳がん患者。データ収集：術後治療の選択から開始迄の外來受診時に参加者個別に各1回半構成的面接を実施した（2015年10月～2016年2月）。面接内容は承諾を得てテープ録音し逐語録を作成した。データ分析：一文脈一意味を分析単位として個別分析後，全参加者にて表現，意味内容の類似性・相違性によりカテゴリー化した。専門家間審議にて真実性の確保に努めた。倫理的配慮：A大学及びB病院研究倫理委員会の審査を受け，承認を得て実施した。

### 【結果】

参加者は5名で，平均年齢は48.6歳。全員，有職で子ども有り。実施術式は乳房切除術1名・乳房温存術4名，腋窩リンパ節郭清術1名・センチネルリンパ節生検術4名であった。面接時間は平均41.0分。心理的状況として，「（医師に抗がん剤は）どちらでもいい，生存率はそう変わらないと言われてどうしたらいいか迷っている」と自分にとっての「抗がん剤治療の必要性の判断困難」や，既に仕事に復帰しており「脱毛が気になる。これさえ解決できれば少しでも治る確率が高くなるなら抗がん剤を受けたい」と「脱毛問題の克服に依る治療の希望」が表出された。また，上司の理解や職場の協力支援に関する「職務継続への懸念」や「母子家庭だから働かなくてはいけない。手術と違って何回も治療が続けられるか」と「生活と継続治療両立の心配」，「息子が受験でこの時期に自分のことで子どもに心配をかけたくない」と治療期間中の「子どもを案じる母親意識」が示された。「手術の前と気持ちが変わった」と治療目的の理解に基づく「初期治療の受け止めと治療への意欲」の6カテゴリーが抽出された。

### 【考察】

術後抗がん剤治療選択時の初発乳がん患者は，がん患者としての体験が浅い中で予後を左右する治療内容を決める意思決定場面に直面し，治療選択を自身で判断するにも不十分な情報量や理解の中，困難や懸念，希望という複雑な心理的状況に在る。また，成人期の公私に亘る役割に起因する周囲への実働的・心理的影響を心配しながらも自分のありようを描き，初期治療目的の正しい理解に基づく治療への意欲を有する。そこで，看護者は患者の治療選択における情動的・情緒的な援助要請の内容を適切に把握し，がんの生物学的状態により推奨される標準治療と共に患者の価値観や社会経済的背景を理解した上で患者のニーズに対応し，肯定的未来思考で意思決定できるよう速やかな支援が必要と示唆された。

本研究はJSPS科研費25463453の助成を受けたものである。

正

290) 初期治療過程に在る成人期乳がん患者の病理検査結果に基づく術後抗がん剤治療選択時の心理的状況

○若崎淳子<sup>1</sup>，谷口敏代<sup>2</sup>，掛橋千賀子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>鳥根県立大学，<sup>2</sup>岡山県立大学

### 【目的】

乳がん個別化治療の進展に伴い，病理検査結果に基づく乳房手術後の術後治療（adjuvant therapy）では患者は医師より術後薬物治療に関する複数の選択肢を示され，抗がん剤治療内容の選択や抗がん剤治療を受けるか否かの意思決定を迫られる。そこで今回，患者の語りを通して，初期治療過程に在る乳がん患者の病理検査結果に基づく術後抗がん剤治療選択時の心理的状況を明らかにすることを目的とした。

### 【方法】

質的記述研究デザイン。研究参加者：初期治療過程に在る乳がん患者。データ収集：術後治療の選択から開始迄の外來受診時に参加者個別に各1回半構成的面接を実施した（2015年10月～2016年2月）。面接内容は承諾を得てテープ録音し逐語録を作成した。データ分析：一文脈一意味を分析単位として個別分析後，全参加者にて表現，意味内容の類似性・相違性によりカテゴリー化した。専門家間審議にて真実性の確保に努めた。倫理的配慮：A大学及びB病院研究倫理委員会の審査を受け，承認を得て実施した。

### 【結果】

参加者は5名で，平均年齢は48.6歳。全員，有職で子ども有り。実施術式は乳房切除術1名・乳房温存術4名，腋窩リンパ節郭清術1名・センチネルリンパ節生検術4名であった。面接時間は平均41.0分。心理的状況として，「（医師に抗がん剤は）どちらでもいい，生存率はそう変わらないと言われてどうしたらいいか迷っている」と自分にとっての「抗がん剤治療の必要性の判断困難」や，既に仕事に復帰しており「脱毛が気になる。これさえ解決できれば少しでも治る確率が高くなるなら抗がん剤を受けたい」と「脱毛問題の克服に依る治療の希望」が表出された。また，上司の理解や職場の協力支援に関する「職務継続への懸念」や「母子家庭だから働かなくてはいけない。手術と違って何回も治療が続けられるか」と「生活と継続治療両立の心配」，「息子が受験でこの時期に自分のことで子どもに心配をかけたくない」と治療期間中の「子どもを案じる母親意識」が示された。「手術の前と気持ちが変わった」と治療目的の理解に基づく「初期治療の受け止めと治療への意欲」の6カテゴリーが抽出された。

### 【考察】

術後抗がん剤治療選択時の初発乳がん患者は，がん患者としての体験が浅い中で予後を左右する治療内容を決める意思決定場面に直面し，治療選択を自身で判断するにも不十分な情報量や理解の中，困難や懸念，希望という複雑な心理的状況に在る。また，成人期の公私に亘る役割に起因する周囲への実働的・心理的影響を心配しながらも自分のありようを描き，初期治療目的の正しい理解に基づく治療への意欲を有する。そこで，看護者は患者の治療選択における情動的・情緒的な援助要請の内容を適切に把握し，がんの生物学的状態により推奨される標準治療と共に患者の価値観や社会経済的背景を理解した上で患者のニーズに対応し，肯定的未来思考で意思決定できるよう速やかな支援が必要と示唆された。

本研究はJSPS科研費25463453の助成を受けたものである。